【個人研究】

サドベリ・バレイ校の教育について

太田　和敬 *

Education at Sudbury Valley School

Kazuyuki Ohta

The Sudbury Valley School is a democratic community which allows students to educate themselves in an environment of freedom and trust. Students and staff each have one vote on all issues, including budgeting, tuition, school rules and staff hiring and contracting.
The school is governed democratically,by the School Meeting. Students are free to do as they wish during the day, as long as they follow the school rules. No one is required to attend class. There are no tests or grades of any kind.
The fundamental premises of the school are that all people are curious by nature; that the most efficient, long- lasting, and profound learing takes place when started and pursued by the learner; that all people are creative if they are allowed to develop their unique talents ; that age-mixing among students promotes growth in all members of the group; and that freedom is essential to the development of personal responsibility.

はじめに

アメリカの教育は1950年代から60年代にかけて、様々な問題を抱えていた。一方ではスプートニック・ショックに代表される科学技術水準を支える、質の高い教育の遅れから、「暴力教室」に象徴される「教育不在」があった。脱学校論に代表される様々な教育・学校批判が噴出したのである。(*1)

しかし、そうした中から、それまでの学校とは違う原理をもった教育を追及する多くの試みがなされた。

そのなかで、成功した教育運動は、日本の教育困難を打開する上でも、多いに参考になるものである。本論文は、既に30年の実践を積み重ね、いくつかの姉妹校を持つに到っているサドベリ・バレイ校の教育を分析することで、既成の教育を批判的に分析する新たな概念を模索するものである。

サドベリ・バレイ校の紹介は、1998年にＮＨＫで紹介された程度で、本格的な分析はなされていない。本論文は、従って、できるだけ具体的な事実を紹介しつつ、サドベリ・バレイ校の教育がもつ今日的意義を考察する。素材は、サドベリ・バレイ校及びその姉妹校のホームページを使用した。

2　サドベリ・バレイ校の沿革

サドベリ・バレイ校は1968年にマサチュー

＊おおた　かずゆき　文教大学人間科学部臨床心理学科

セッツ州のボストン近郊に設置された、まったく新しい教育理念に基づいた学校であり、現在、サドベリ・バレイ校のホームページに姉妹校として30校が掲載されている。(1)

サドベリ・バレイ校は４歳から１８歳までの子どもは、誰でも受け入れる、幼稚園から高校レベルまでを包括した学校である。(*2)

New England Association of Schools and Colleges の認可を受けており、高校卒の資格を取得できる。私立学校で、財政的には、ほとんど授業料に依拠し、公的補助金は受けていない。ちなみに1993年の収入は、413,500ドルの内、410,000ドルが授業料、残りは、貯蓄からの利子となっている。生徒は約200名だから、一人当たり平均2000ドルであり、一部の寄宿制の私立学校のように、２万ドルの１割であるが、無償の公立学校から見ると、やはり高額である。(2)

できるだけたくさんの子どもが通学できるように、授業料は低く抑えているとサクラメント校は説明している。(3)

貧しい者は学べないのか、という質問に対して、実際に授業料を払うことができない生徒もいるが、排除しておらず、全体として生徒の家庭は、必ずしも裕福ではない、としている。(4)

施設は、美しいビクトリア朝の邸宅であり、昔の富豪の屋敷であったという。１０エーカーのキャンパスをもっており、本がたくさんある。グランドはスポーツにとってすばらしいもので、また、学校は、科学生物室、暗室、ピアノ・ステレオなどの設備があり、釣りができる池やコンピューターがある。しかし、学級のための「教室」は、存在しない。(5)

３　カリキュラムとクラスのない教育

サドベリ・バレイ校の最大の特徴は、定型的な教育課程・過程をすべて否定していることである。学校が学校であるための要素として、教師・生徒（学級集団）・教育課程（カリキュラム）は不可欠のものであろうが、サドベリ・バレイ校には、こうした要素が欠けている。もちろん、教師はいるし、生徒もいるが、通常の教師－生徒の関係とは著しく異なっている。

誰も授業に出席することを要請されない。確かに、授業は、通常の意識における「授業」とは似ても似つかない。試験も学年もない。生徒とスタッフはあらゆることに対して平等である。互いにファーストネイムで呼びあい、生徒とスタッフの関係は生徒同士の関係と容易には見分けがつかない。(5)

例として、算数の授業がどう行われたかの報告を紹介しよう。ダニエル・グリンバーグというサドベリ・バレイ校の中心的教師の実践記録からである。

12名の９歳から12歳までの子どもたちがやってきて、加減乗除を学びたいと私に頼んだ。

「君達は本当はそんなことをしたくないのだ」と、彼らが最初に私にやってきたときに、私は言った。

「私たちは、したいのです、確かに」というのが、彼らの答えだった。

「いや、本当は違う」と私は主張した。「君達の近所のひとや、友達、親、親戚なんかが、おそらく君達がそうすることを望んでいるだろう。でも、君達自身は、もっと遊びたいとか、違うことをやりたいんじゃないのだろうか。」

「僕たちは僕たちが望んでいることを知っています。僕たちは算数を学びたいんです。教えてください。そうしたら、私たちは、それを証明してみせます。私たちは、全部宿題をやるし、できるだけ一生懸命勉強します。」

私は、それから懐疑的に承知しなければならなかった。私は、算数が、公立学校では、６年間かかることを知っていたし、彼らの興味が、２、３カ月で挫折することも知っていた。しかし、私には、選択はなかった。彼らは激しく催促した。私は考えた。

私は驚いていた。

問題はテキストだった。「新数学」の発展に関わっ

て、その後いやになった。スプートニックショック以後の若きアカデミシャンの時代に、疑問はもっていなかった。抽象的な論理の美しさとか、集合論とか、数論などに満たされ、数学者たちが至福をもとめておこなったゲームに満足していた。私は、農民のための農業を構築するなら、有機化学とか、発生学とか、微生物学などから始めるのがよいと思う。

私は、「新数学」の仮面や難解さを嫌うようになった。何を意味するのか分かっている教師や生徒は一人ではない。だが、人々は、計算のための算数が必要なのである。彼らは、道具としていかに使うかを知りたがっている。それが、生徒が望んでいることなのだ。 1898年に書かれた算数のテキストを見つけた。数千の演習問題があり、鋭く、かつ素早く若い精神を訓練する。

授業は始まった。定刻に。それが約束だった。「本気かい？」私は挑戦的に質問した。「じゃ、君達に部屋で定刻に会うことを期待しよう。きっかり11時に。毎週火曜日と木曜日に。もし、５分遅れたら授業はない。もし、２回授業が流れたら、もう教えない。」「それでいいよ。」彼らは言ったものだ。目を輝かせて。

足し算は２時間。すべて学んだ。引き算は２時間ともう１時間かかるかも知れない。「借りる」ことが、もっと説明が必要なのだ。

掛け算は表をつくった。みんな表を暗記しなければならなかった。問題を繰り返しやった。

彼らは高揚した気分だった。すべてが。一緒に漕ぎ出し、あらゆるテクニックやアルゴリズムをマスターしながら、素材が血肉化するのを感じることができた。何百題もの練習問題をやり、クイズ、口頭試験をやり、素材が頭の中に固まっていった。

９歳から12歳の子どもたちが、恥ずかしがらずに協力して、継続していた。

割り算。大きな割り算、分数、少数、パーセント、ルートなど。

11時きっかりにやってきて、１時間半勉強し、宿題をもって帰り、そして、次のときには、みんな宿題をやってきた。

20週間、つまり、20回のコンタクトで、すべてをカバーした。６年分を。すべての者が、素材を確実に理解した。(6)

この事例は、ふたつの側面を示している。

第一に、まず、授業は、生徒がやりたいと望み、教師と交渉し、交渉が成立したときにだけ行われるということである。そして、この場合には、身分としても教師であるグリンバーグ氏が教えているが、時には、年長の生徒が教師となる場合もあるし、また、教師資格のないその道の専門家を招くこともある。ＮＨＫのテレビ放映では、料理を教えるコックと、家造りを教える大工が登場した。学習は強制ではないが、生徒が主体的に望んだときには、通常の学校にはない内容でも、最大限保障される。

従って、特に教えてもらう必要を感じない生徒は、自分の興味のある本を取り出して、自習をする。これもＮＨＫの番組では、教師用の指導書を参考書として、数学をどんどん自習する生徒が紹介されていた。この方が分かりやすいし、教師に負担をかけなくてよい、とその生徒は述べていた。

このように、何を学んでもいいが、簡単に学べるという訳でもない。ＮＨＫでの紹介の際には、家造りを学び、大工を先生として招いている生徒たちは、材料費を稼ぐ為に、アイスクリームの販売などを行い、また、料理を学んでいる生徒は、料理を生徒に出して費用を出していた。

このように、学ぶときには、通常の学校のように、お膳立てされた状況で差し出されるのではなく、学習の条件も自分たちで創り出す必要がある。(7)

第二に、一端、教師と生徒たちの約束が成立したら、それは、一種の「契約」であり、契約履行の責任が、生徒にも求められることである。

さて、前者に対して、直ぐに次のような疑問が起きるだろう。

「子どもが学びたいという欲求を持たなかったら、読み書き能力なども形成しないままになるのか？」

これに対しての回答は次のようなものである。

子どもは本来学びたいという欲求をもっているのであり、それを抑圧せず、学びたいという欲求を自然に喚起するような環境におけば、必ず、学びたいという欲求をもつものである。サドベリ・バレイ校では、異年齢集団が基本なので、常に、年上の生徒が、思い思いに本を読んだり、学んだりしているのであり、そういう中に自然に入っているのである。従って、むしろ、通常の学校よりも、強く、また、早い時期に知的関心をもち、どんどん学びたいものを掴んでいくのである。(4)

サドベリ・バレイ校の原則からみると、むしろ問題は、「学校では何故もっと学ばないのか」ということになる。その回答は、次のようになる。

答は単純。現在の学校は、「学ぶこと」が、「教えられること」を意味するような施設だからである。誰かが学ぶことを欲するときには、「教える」わけだ。もっと学ばせたい、なら、もっと教える。ドリルをもっともっとやる。

しかし、学ぶということは、あなたがやる過程なのであって、あなたに対して行われる過程なのではない。それはすべての人にとって当てはまることである。それが基本だ。(8)

学ぶべき内容が所与のものであり、かつ競争などを通して強制される、そこに、学校で学習が行われない理由を見いだすのである。逆にいえば、「なぜ、人々は学ぶのか。funnyだから、と答えるだろう。アリストテレスは、「人間は、自然に好奇心をもっている」と書き、デカルトは、少々違うが「我思う、故に我あり」と書いた。学ぶこと、考えること、実際に精神を使うこと、それは人間の本質であり、本性である」(8)という点に依拠すれば、子どもはどんどんと学ぶようになるという。そして、学習への欲求は、「飢え、渇き、性などの欲求よりも強い。何かに夢中になると、――夢中になるということが重要なのだが――人は、他の欲求をすべて忘れるくらいである。」(8)

だから、教師の役割は、「学ぶプロセスをちょっとだけ早くするように手伝う」ことに限定される。(8)

サドベリ・バレイ校には、通常の意味の「class」も存在しない。

class という英語の言葉は、日本語では、教育上、「学級」と「授業」というふたつの意味をもっている。これは、現代の学校では、授業が学級を単位として行われることが、当然のこととして前提されていることを示している。(*3)

サドベリ・バレイ校では、

「クラス」とは、二つの集団（パーティ）の間のアレンジメントである。それは、誰か、あるいは数名の人で始められる。その人が、特別な何かを学びたいと決める。例えば、代数、フランス語、物理学、綴り、あるいは、陶器作り。何度も何度も、彼らは、どうやってやるかを、明らかにする。本や、コンピュータープログラムを見つけ、あるいは、他人を見る。そうしたとき、それは、「クラス」ではない。単なる「学習」である。

一人ではできないときがある。すると誰か助けてくれる人を探す。その人は、彼らが学習したいことを、正確に与えることに同意する。誰かを見つけたとき、「我々は、これこれのことをやる、あなたもこれこれのことをやる、いいかい?」もし、「いいよ」ということで、集団すべてが同意すれば、そこで、「クラス」が形成されるのである。(8)

つまり、クラスとは、生徒にとってもともと単位として存在し、学校側からあてがわれるものではなく、むしろ、自身の欲求から形成していき、役割を果たしたら解体するものである。

教師と生徒も固定的ではなく、先述したよ

うに、年長の生徒が、教師の役割を演じることもある。更に、

学校には、ときどき開かれる別の種類のクラスがある。それは、本にはないような新しい、ユニークなものがあるかもしれないと感じたり、別のものが興味深いかも知れないと感じたときに、開かれる。例えば、「木曜日の10時30分に、ゼミナール室に、＊＊に興味ある人はこられたし」というお知らせを出す。興味を示せば、続行されるし、そうでなければそれで終わりになる。最初のときに、もし2度目があるとしても、来ないという決定をすることも可能である。

教育学において、極めて重視される「学習の系統性」と「共通基礎教養」に関する考え方が、サドベリ・バレイ校はかなり異なっていることが分かる。

前者に関しては、明確に否定していると言えるだろう。

サドベリ・バレイ校の姉妹校のサークル・スクールの理念の説明は、次のように書いている。

サークル・スクールは、学ぶ技術の習得を、ある特定の教科を学ぶことよりも、非常に重視している。我々は、子どもが、ある一定の年齢で、一定の教科内容を学ぶものだ、ということを信じていない。

これまで述べたように、子どもは自然に学びたいという欲求をもっているのだから、それを邪魔しないことが重要であり、学ぶべき内容を教師が与えることは、むしろ、そうした自然の欲求を阻害すると考える。そして、世界そのものが連関して、学ぶ最良を提供しており、各人の興味関心は異なっているのだから、学習の一定の順序性や系統性などは、否定されるわけである。(9)

しかし、サドベリ・バレイ校が、まったく基礎教養を否定している、というわけではない。強制はしないが、学ぶべき内容に対する枠組みはある。ただ、それを考える方向性が異なっているのである。

サークル・スクールのプログラムと題する文書がある。そこには、４つの教育目的が掲げられている。

・主体的な指導性－自己管理
・責任ある市民性－他人の尊重－他の価値観民族、宗教等への寛容、建設的な姿勢
・自己表現－自己行動
・基礎技術の習得－読み・書き・算・分析・説明・思考・資料探索・問題解決(10)

この４番目の内容は、明確にサドベリ・バレイ校で学ぶことが期待されている内容である。しかし、その具体的な授業については、あくまでも、これまで指摘したようなやり方で学ぶだけである。

また、別の文章には、具体的にどんな勉強も可能である、として例があげられている。

数学・理科・美術・バイオリン・木登り・大工・中古自動車の修理・日本語・草取り・健康衛生・事務経営・折り紙・ボクシング・ロケット模型・コンピュータープログラムなど。

４　構成員自治

サドベリ・バレイ校のもうひとつの特徴は、その徹底した民主主義的な運営である。民主主義的な構成員自治で有名なサマーヒルから学んでいる要素を認められるが、アメリカの建国理念をもうひとつの源流としている点で、異なっている。

サドベリ・バレイ校は、自らを「自治学校(self-government school)」と規定している。

「民主主義学校」と題するサドベリ・バレイ校の文章は、アメリカ民主主義が、個人の権利、政治的民主主義、機会の平等という三つの理念をもっていながら、学校の生徒には、それを保障していない現状を改善するという

意識を表明している。従って、サドベリ・バレイ校の運営は、このアメリカ民主主義理念の子どもへの保障形態なのである。(11)

その特徴は、

１　学校のあらゆる運営事項を、構成員（生徒・教師――保護者が加わる学校もある。）による委員会で決定する。その運営事項には、規則の制定はもちろん、処分や財政問題、そして、教師の任免も含まれる。

２　構成員の権利は、４歳の生徒から、教師まで、一人一票で、完全に平等である。

３　トラブルの解決のために司法委員会があり、教師と生徒の代表が、日常的なトラブル処理を行い、特に重大な問題は、全体の学校会議で取り扱う。(12)

学校内には、司法制度によって、規則が強制されている。その規則は、25年間に数回改訂された。現在は、２カ月ごとに選出される二人のオフィサー（常に生徒、最初に地位が開かれて以来）５人の生徒が毎月ランダムに選出され、また、毎日選ばれるスタッフによって構成される司法委員会が中心となっている。司法委員会は、破られた学校規則の不満について調査し、ときどき罰を与える。もし、司法委員会が、ある人を有罪と考え、彼が無罪と主張すると、法廷が開かれる。もしある人が有罪と主張したり、あるいは、法廷で有罪とされると、被告は司法委員会で判決を言い渡される。陪審の表決や判決が被告によって不当であると考えられると、学校会議に持ち出される可能性もある。

すべての学校会議は、平等である。事実、最初の有罪表決は、スタッフメンバーに対するものであった。典型的な判決は、２日間外出してはならない、１週間２階に行ってはならない、というようなものである。(12)

この部分は、ＮＨＫの番組でも詳細に触れられていた。そこでは、ロッカーでお金が連続して盗まれる事件を扱っていた。最初被害者は、自分の不注意かと思ったが、何度か繰り返されたので、司法委員会に訴え、司法委員の調査によって、ある新入生（10歳前後）が、犯人ではないかという疑いをもたれた。本人を呼び、話し合ったところ、盗んだことを認めたので、処分をどうするか、学校全体会議に付されることになったのである。そこでは、本人はもちろん、学校関係者全員が出席し、意見を述べていた。こうしたやり方は、現在の日本の学校の処分が一見、厳しいようでいて、秘密理に処理され、当人が全体の前で弁明をしなければならないことなど、決して存在しない手続きと比較すると、いかにも本人にとって厳しいものと思われる。実際の処分内容は、親と話し合うまでの停学と、しばらくの間、司法委員を勤めるというものであって、それほど厳しいものではない。しかし、学校関係者全員の前で、処分が討議され、そこにいなければならないことは、本人に責任をとらせる上で、まことに厳格なものであろう。

ちなみに、アメリカでは、裁かれた者が、処分として「裁く仕事」を課せられる、というのが、少年法廷などでも正式に取り入れられており、問題行動の是正の方法として、大きな効果をあげている。サドベリ・バレイ校でも、それが採用されているわけである。

学校は、学校会議によって、民主的に運営される。学校会議は、毎週行われ、生徒とスタッフで構成され、あらゆる問題について決定する。自分たちのメンバーから、運営代表を選挙したり、（適任であるかどうかについてに関する限り、生徒もスタッフも区別はない。）学校規則を制定したり、（司法委員会に促される）、予算計画を作成したり、年間予算を承認する委員会に提出したり、スタッフの任命・罷免を行ったりする。（終身雇用は存在せず、毎年契約更新される。）

学校委員会は毎年開催され、生徒、スタッフ、そして親によって構成される。（ほとんどの親は授業料を支払うので、お金の使用について声を聞くことが、合理的と考えられて

いる。）　学校委員会は、（学校会議から提出された）予算を承認し、授業料やスタッフのサラリーを決定することも含む。生徒の卒業について投票する。学校委員会は、学校の政策決定機関である。(12)

民主主義だけでは、安定した幸福な共同体を作ることはできない。革命で引き裂かれた民主都市国家古代ギリシャは、この証拠である。同時に、個人的自由と権利が尊重されることが重要なのである。同様に、学校は、権利宣言によって保障されている自由を生徒に保障している。通常、アメリカ社会においては、生徒は、思想や宗教の自由（親が子どもに対して日曜学校に行くことを強制する。）集会の自由（伝統的学校では、トイレに行くために席を離れることは、教師の許可なしには、許されない。）を与えられていない。

これらを貫く倫理は、「自己責任」である。サドベリ・バレイ校では、学習すること、あるいはしないこと、また、することによる結果について、本人が責任をもつのである。そして、「選択の自由・行動の自由・結果に耐える自由」という三つの自由が、完全に保障されることで、責任を明確にするのである。

これは、教師が、勉強する内容を決め、勉強しないという行動は認めず、そして、責任もとらせない、通常の学校とは、まったく異なる原理である。

私が大学の授業で、サドベリ・バレイ校を紹介したときにも、この点についてのとまどいが多く見られた。

ある学生は、「４歳の子どもと言えども、何をするかは、自分で決めなければならない、というが、自分がそのような立場におかれたら、とてもやっていけないだろう」と疑問を呈している。逆に言えば、これこそ、日本の学校が、自己責任とは無縁な状況を示している。

自己責任の能力は、選択の自由を小さい頃から認めることによって、形成されていくと考えられる。

そして、自己責任の最たる部分が、子どもが教師の任免の鍵を握っているという点にある。

サドベリ・バレイ校では、年度の終わりに、全生徒が、全教師の評価を行う。そして、次年度も教師として来てもらうのが良いかどうか、来てもらうとすれば、週何日が適当か、などという評価表に記入して、それを集計した結果に基づいて、やはり学校会議で、次年度の教師の採用を決定するのである。

生徒の評価がいいかげんなものであれば、次の年度のサドベリ・バレイ校の教育・生活に直接、悪影響を与えることになる。

５　卒業生と親の意識

では、サドベリ・バレイ校を卒業した人は、サドベリ・バレイ校の教育をどのように評価しているのだろうか。

こうした点で、否定的な評価は、前面にはなかなか出て来ない傾向があるから、それは考慮する必要があるが、表面に現われている意見としては、次のようなものがある。

ある卒業生は、何か決められた勉強をしているという感じはしなかったが、いつも、たくさんの人と話したり、そこから学んだりしていた、と述べている。(7)

また、テレビには、何人かの卒業生が登場したが、いずれも、そこで自分が何をやりたいのか、見つめることができた、と述べている。従って、知識を得たり、ある特別な能力ではなく、事態に取り組んでいく姿勢のようなものが形成されたと評価している。これは、サドベリ・バレイ校の教育が目指しているものと一致している。

このような自由な学習の成果として、グリンバーグは、あるトランペットの一流奏者になったリチャードという生徒を紹介している。彼は、学校に来て、毎日毎日トランペットを４時間以上も吹いていた。サドベリ・バレイ校には、比較的離れた所に、トランペッ

トなどを演奏しても、周りに迷惑をかけないような建物があり、そこで、彼は気兼ねなく練習することができた。(6)

こうした教育は、以下のような認識に依拠している。

では、20世紀の末には、生徒によいキャリアを用意できるのは、どんな種類の学校であるのか。

われわれは、この答えにと格闘する必要はない。誰もがそれを書いている。いまや、ポスト産業社会である。情報の時代である。サービスの時代である。創造性、企画性の時代なのだ。将来は、自分の精神を、新しい材料、古い材料、新しいアイデア、古いアイデアに応じて、処理し、形成し、組織し、運動することができる人に属する。

そういうことは、通常の学校でのカリキュラムでは、できない。サドベリ・バレイ校では、これらの活動は、全体のカリキュラムなのである。

訓練されていない耳には、こじつけのように聞こえるかも知れないが、歴史と経験は、われわれが正しいことを示している。卒業生で大学に行きたい者は、すべて第一志望の学校にいった。成績証明書、通知書、レポート、学校推薦などなしに。大学の担当者は、何を見たのか。なぜ、彼らは、生徒を受け入れ、ＳＡＴの高い得点と同様な扱いをしているのか。

訓練された専門家達は、私たちの生徒の中に、輝かしく、敏活で、自信をもち、創造的な精神を見いだしている。すべての進んだ学校の夢を。

彼らは、医者、ダンサー、音楽家、ビジネスマン、芸術家、科学者、作家、技術者や建設家などになっている。

だれかやって来て、「最良のキャリアをつかむために、どんな学校にいれたらいいでしょうか」と質問したら、躊躇なく、「その目的で最良なのは、サドベリ・バレイ校です。」と答えるだろう。未来に向けた仕事をしているこの国で唯一の学校である。

職業に関する限り、サドベリ・バレイ校は、未来のショックに向かい、そして、それを克服してきた。過去に汚れていない。(8)

サドベリ・バレイ校は、決して、教育理念に閉じた学校ではなく、未来へのキャリア形成を強く意識し、未来の社会像の中で、子どもに形成されるべき能力を、具体的に意識しながら、卒業生を社会に送り出しているのである。

では、親はどのような意識でサドベリ・バレイ校に、子どもを通わせるのだろうか。

ダヴィッド・フリードマンは、夫婦共に、一流と言われる学校に通ったが、そこでは、決められた時間や場所に縛られて、教育とは怠け者のために悪魔が仕事を与える行為だ、というような感覚が支配していたという反省から、サドベリ・バレイ校に入れたと述べている。そして、他の学校と比較して、優れている点として、

1　好きなときに、好きなこことを学習できる。
2　すべての子どもが、一緒に過ごし、区分されないこと。
3　民主的に運営されていること

をあげている。(19)　また、ジーン・ウィリアムは、通常の学校が、子どもにプレッシャーを与え、強制することで、学習の喜びを奪ってしまうのに対して、自発的な学習を行うサドベリ・バレイ校では、子どもが楽しんで学習するという点と、民主的な運営による自己責任を評価している。(13)(いずれも、Cedar校の親。)

しかし、親にも葛藤があるようだ。

ＮＨＫの番組では、料理を学んでいるジョナサン君という男の生徒が、主人公のように登場するが、彼は、９歳まで、全く文字の学習に興味を示さなかったという。母親は、さすがに、サドベリ・バレイ校の教育方針には賛成であったが、家庭で文字を教えようかと迷ったそうだ。しかし、子どもの人生は子どものものだ、と思いなおし、子どもを信じて、家庭では何もしなかったと述べていた。

サドベリ・バレイ校のあるスタッフは、番組の中で、学校の方針を支持しているのに、

家庭でいろいろと勉強を強制している親もい
る、と残念そうに語っていた。

最後に、サドベリ・バレイ校の考える新旧教育のパラダイム表を掲載しておく。

支配的パラダイム	**我々の選択したパラダイム**
子どもが大人を必要とする理由	子どもは若い人である――年齢は数値である。
子どもが大人を必要とするのは、成熟しておらず、何が最も良いことかを知らないからである。	我々の文化は、人々にとって年齢に応じて何が可能であるかについての適切な意識の優位さとコストを認めることから始めただけである。若い人は能力がある。偏見から解放されたとき、若い人々は驚くべき能力を示し、顕著なことがらを達成する。
大人は経験と智慧を持っているがゆえに、子どもにとっての最良の利益のための選択が可能であるし、またすべきである。	大人の役割モデルの経験と智慧は価値のあるものであるが、経験や智慧は他人に強制できない。アドバイスは、尊敬の念があり、自由に選択された場合に有益なのである。それらが欠如している場合には、本当のアドバイスではなく、強制あるいは支配なのである。
子どもたちは、悪い影響にさらされている。彼らは、将来や幸福に悪影響を与えるような過ちから保護される必要がある。	何か齟齬があれば、フィードバックされる。自己の選択による結果から保護することは、それが如何によいことを意味していても、学ぶ能力を阻害する。
大人として成功するために、すべての子どもが学ばなければならない知識の体系がある。この体系は、数学、理科、社会、歴史のような科目に組織された、１３年間のカリキュラムによってもっともよく習得される。	指定された知識や技術の体系は、成功し、充実した生活を獲得するには十分ではない。平等な環境では、若者は、人生を豊かにするような質を向上させることができる。自信、コミュニティの一員としての責任、効果的なコミュニケーション、自分で考えること、などなど。そのような基礎づくりこそが、知識や技術の体系に達することを可能にするのである。

子どもたちは、資格のある専門家（教師）に教えられることによって、知識や技術を獲得する。伝統的に構成された学校は、子どもが学ぶことができる最良の環境をつくり出している。	階層的なコミュニティ（学校）の構造は、本質的に限界があり、不必要なものである。民主的な構造は、個人が等しく権限を行使するのだが、競争よりも協調を、支配よりも個人的な責任を、恐れよりも信頼を重視するのである。我々は誰でも、教師であり、また生徒である。大人として、我々は、学びたいときに人とと機会を求めるのである。子どもたちは、これと同じ自由を与えられるべきである。
子どもは親の反映と拡張なのだから、親が子どもの行動やとるべき道にに最終的には責任を持たなければならない。	誰でも、固有の尊敬に値する個性をもっている。子どもが、どのようにして、恐れや信頼の欠如から、道を外してしまうか、考えてみてほしい。両親や他の大人の信頼は、子どもに対して、年齢とは無関係に、責任ある個人的選択を可能にするのである。
大人になる準備	**これはそれ**
子ども時代は特別な時期である。それは、真の世界、つまり、大人になって直面しなければならない世界への準備に使われなければならない時間である。このために、我々は、適当な年齢のときに知る必要のあることを子どもに教えるようにデザインされた学校をもっているのである。	これこそが、生徒たちの真の生活であり、リハーサルなどではない。なにか、不完全なものとして扱われることは、若者に対して、なんらかの準備を効果的にさせるものではない。若者は、全体として、まっとうな人間として扱われたときに成長するのである。信頼と尊敬の雰囲気の中でこそ、各人は成長し、自分の潜在能力を十分に引き出すのである。
子どもたちは、少なくともこの時期に基礎を学ぶのであり、早ければ早いほどいいのだ、という確信を持たなければならない。	すべての年齢の人達は、自然に好奇心をもっているのてあり、その好奇心を満たすことで、学ぶのである。これは、呼吸と同じくらい自然なことである。我々は、それが有用だ、あるいは興味深いと思ったときには、いつでも、なんでも学ぶことができるし、また、学ぶだろう。

誰でも、よき環境におかれるべきだ。子どもをより多様な知識やカリキュラムに接するようにさせるのは、親と学校の責任である。	最も価値があり、長く継続する学習は、学習者自身によって導かれたときに生じる。今日の世界では、我々は、みな、たくさんの興味あることがらに接している。誰もが学ぶ人間的な知識の一部を前もって選択することが、学校の仕事であるとは、我々は信じない。使用できる無制限の可能性からこそ、各人は、自分自身のために選択しなければならない。
子どもたちは、指定された道を歩んでいる間は、指定されたことをしなければならない、さもなければ、大人のような失敗をするかも知れない。早期に間違った選択をすることは、後の人生に有用な選択を厳しく制限するかも知れない。	人々は、創造的で生涯の学習者なのである。若い人の生活をコントロールしたり、結果を決定したりすこるとは、単にこの創造性を窒息させるだけである。我々が生きている限り、我々は、いついかなる時でも、新しい選択をする自由がある。相互にこの質を信頼することが、我々すべての成長と発達を継続的に支援するのである。
子どもたちは、嫌いなことでもするという訓練をしなければならない。子どもたちが、これらを困難なことを通じて行うにように確信させることが、関係する大人の役割である。彼らを放置していたら、彼らは安易な道をとるだろう。	価値ある唯一の訓練は、自己訓練である。支配は自己訓練の発達を阻害する。
大人によるテストと評価は、進歩を計測するのに決定的に重要である。	誰かが求めるのならば、批判は建設的でありうるが、最も意味のある進歩の評価は、自己評価である。
外は厳しい世界であり、誰もが、自分を守るために準備をする必要がある。	もし、一人で直面し、大人が欲することを与えるような形式的な教育によって保護を期待するのなら、厳しい世界である。世界は、冒険と機会に満ちている、もし、人生が創造的な仕事をして、創造的な仕事のパートナーがいれば。

http://members.cruzio.com/~pvillage/pvs2.html

註

*1　Ivan Illich “ Deschooling society ” 1970, Evert Reimer “ school is dead ” 1971

*2　サドベリ・バレイ校の姉妹校であるリバティ校でのＦＡＱにどんな生徒が好ましいのか、という質問に対して、以下のように答えている。

　ある種の宣伝的な文章であることを考慮する必要はあるが、それぞれの特質のある生徒に対して、利点があるというのである。

　よい生徒――　伝統的な学校では、競争や外見、社会的地域、性別などのヒエラルヒーによって支配されている。競争やグレイ度はなく、協力と相互信頼の雰囲気がある。

　怠け者の生徒――　興味のあるものをなんでもできる。

反抗的な生徒――　民主主義的に規律が保たれ、自分自身を律することがてきる。反抗する必要が減少する。

注意力散漫、過剰行動の生徒――　自由に振る舞うことができ、自分に効果的な学び方ができる。

孤立した生徒――　統率力のない生徒は、退屈するので、追及したい興味のあることに向かう。

間違って扱われた生徒――　ここでは、すべての生徒に尊敬が払われているので、間違って扱われることはまずいない。

集中するものをもっている生徒――　十分にできる。

理想家――　自由と真の責任をもっていると を好むだろう。

http://www.ntsource.com/~bxmith1/faq.htm

*3　Scott Gray

http://www.sudval.org/svs/injustic.html

　学級は、家畜が入れられる檻のようなものであり、様々な屈辱のシステムによって運営される。それを拒否すれば、「無断欠席」と非難され、真の自由を求める者は、排斥される。

ホームページのURL

(1) http://members.cruzio/~pvillage/others.html

Alpine Valley School, Aspen Village School, Booroobin Learning Center, Cascade Valley School, Cedarwood Sudbury School, Circle School, The Clerawater School, Democratic School of Golan Heights, Democratic School of Hadera, Diablo Valley School, Fairhaven School, Greenwood Sudbury School, Highland School, Independece School, Liberty Valley School, The New School, Red Cedar School, Sands School, Sudbury SChool of Scottsdale, Windsor House School, The Chicago Group, Marin Sudbury School, The Mauri Sudbury School

(2) http://www.sudval.org/svs/svsfaq.html

(3) http://www.jps.net/sacval/brochure.html

(4) Jerry Mintz http://www.sudval.org/svs/wayne.html

(5) http://www.sudval.org/svs/svsfaq.html

(6) Daniel Greenberg http://www.sudval.org/svs/free.html

(7) http://www.sudval.org/svs/mike.html

(8) http://www.sudval.org/svs/bac2basc.html

(9) ‘ The Circle School Philosophy ’ http://www.microserve.net/~circle/phil.html

(10) http://www.microserve.net/~circle/program.html

(11) http://www.sudval.org/svs/crisis.html

(12) http://www.sudval.org/svs/svsfaq.html

(13) http://www.webpage.com/scvs/Whe_We_R.html